

チエチーリア・バルトリ ●メゾソプラノ Cecilia Bartoli

取材・文 中東生
Text Shinobu Naka

モーツァルト生誕250周年であった2006年はチエチーリア・バルトリにとっても、モーツァルトを介した実りの多い1年となった。1月にはモーツァルトゆかりの街ブラハやベルリンでバレンボイムとのコンサート、3月にはジョン・ミヨンフンのピアノで13年ぶりとなる来日公演も好評を博した。その「モーツァルト・イヤー」を迎える直前の2005年11月18日、氏にモーツァルトの魅力などについて話を聞いた際の記録が以下の通りである。

待ちに待ったインタビュー当日、チューリヒは初雪に見舞われた。2005年4月に彼女がチューリヒ歌劇場で《シュリオ・チエーザレ》を歌った時から、私たちはインタビューの現に向けて、着々と計画を進めていたのだった。みぞれに変わった雪もやんだ頃、湖沿いの5つ星ホテル、エデン・オ・ラックに、10分の遅刻を詫びながら現れたバルトリは、びつくりするほど自然体だったが、さすがに彼女の存在は圧倒的で、その場はパッと華やいだ雰囲気になった。舞台上で聴衆を惹き付ける、あの笑顔、愛嬌、気配り、親近感を直に見て感じる事ができた。



バレンボイム、アーノンクー ルの導き

——これまでに取り組んだモーツァルトのオペラについてお話しただけですか。

バルトリ（以下、B） 私をモーツァルトの世界へと導いてくれたのはバレンボイムでした。彼と出会ったのは、私かまだ若い頃、20歳か21歳の時だったと思います。彼は私に「モーツァルトを勉強するように」とアドヴァイスしてくれました。そして、モーツァルトのコンサート・アリアで、一緒にいくつものリサイタルを開きました。こうして長い期間、ダニエルとモーツァルトの勉強を重ねた後、《フィガロの結婚》のケルビーノを彼の指揮で歌い、実質的なオペラ・デビューを果たしたのです。もともと、私にとっての初めてのオペラは、8歳の時に歌った《トスカ》の牧童役ですが（笑）。彼とは《ゴジ・ファン・トゥツテ》のドラベツラも歌いました。

バレンボイムは、私にとって初めての偉大な指揮者で、まだとても若かった私に最高のアドヴァイスをしてくれたと思っています。彼とはその後も、録音やリサイタルで共演しています

2012年のザルツブルク聖霊降臨祭で

モーツァルトのオペラは、それぞれの役の性格を浮き彫りにしながら歌うのが、難しくもあり、また魅力でもあります。



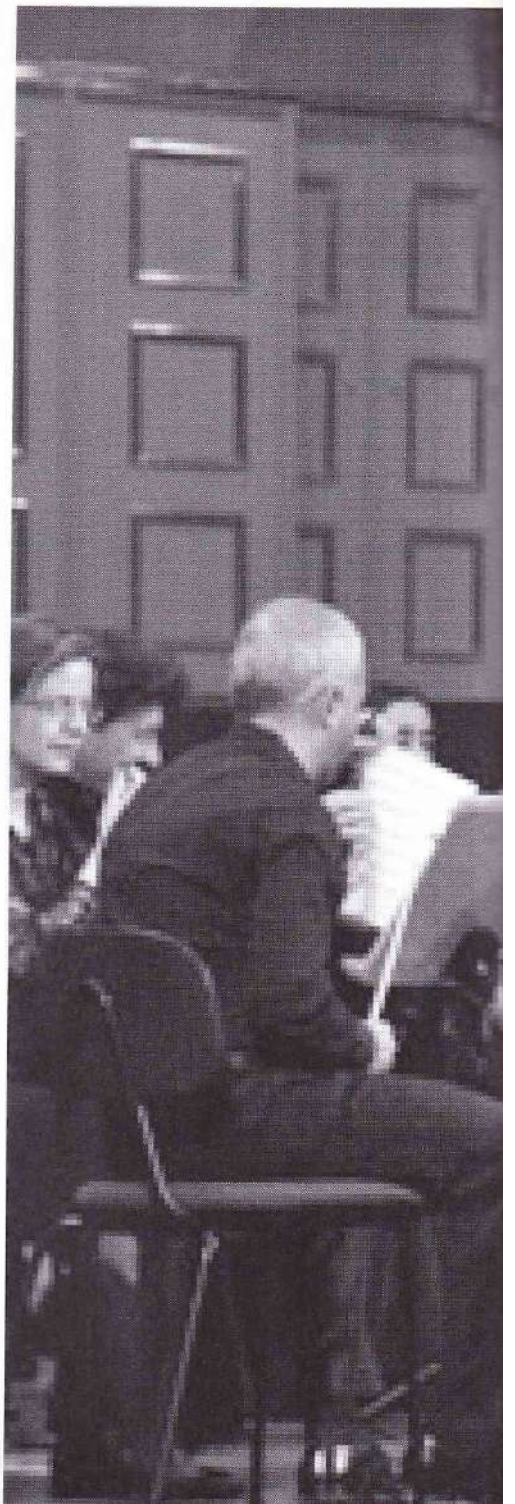
し、2006年はベルリンとプラハでもリサイタルをすることになっています。

バレンボイムとのオペラ・デビューから1、2年経った頃でしょうか、その評判を聞いてか、アーノンクールがオーディションをして下さり、「チューリヒ歌劇場でケルビーノを歌えるか」と尋ねられたのです。その後、彼の指揮で《ドン・ジョヴァンニ》のツェルリーナを歌ったことも印象に残っています。ウイーンでは《ルーチョ・シツラ》のチェチャーリオも歌いました。彼もまた、私をモーツァルトの世界に引き込んでくれた最初の指揮者の1人でした。バレンボイムとアーノンクールが、私とモーツァルトとの関係を決定的にしてくれたと言っても過言ではないでしょう。その導きに、私はとても満足し、感謝しています。

私のモーツァルトオペラにおけるキャリアは、このように初めは、若く、女性に求愛する役柄から始まりました。ケルビーノなど、彼とほぼ同い年の私が演じるといふ幸運に恵まれ、その後、ドラベツラやツェルリーナも歌い、時と共に、1つのオペラの中で複数役を演じられるようになっていったのです。それはなんとなく、どこか自

分私自身の成長過程に似ているように感じます。

例えば、1995年にメトロポリタン歌劇場にデビューしたのも《コジ・ファン・トゥツテ》で、デスビーナ役に挑戦しました。その時は、既に歌ったことのあるドラベツラ役とはまた違う観点からこのオペラを経験することができました。その後、フィオルデイリージ役も、チューリヒ歌劇場ではアーノンクールと、またラトルとは昨年ザルツブルグ音楽祭で歌いましたので、《コジ・ファン・トゥツテ》の女性の役は全員分歌ったことになりました。他には、《皇帝ティートの慈悲》のセストなども歌いましたし、数年前にウイーンでDVDにも録音されたシヨルティとの「レクイエム」——こ



れは数年前にDVDにも録音されました——やミサ曲、コンサート・アリアなども多く歌っています。

モーツァルトの難しさと魅力

——それらの役の難しき、魅力についてはどうお考えですか？

B モーツァルトの描く女性たちは、それぞれ異なった、特徴的な性格をもっています。その性格は、音楽のラインにも現れており、それぞれの人物ごとに特有のラインが与えられているのです。そのラインが、彼女たちの性格のみならず、社会性、属する階級までも表しています。

例えば、デスビーナの音楽の中には、民衆、ある意味で庶民の世界が感じられます。同じモーツァルトという人物

が、デスビーナに関してはこのようなメソッドで音楽を作り、ドラベツラ、フィオルデイリージに対しては、全く別の手法で音楽を与えているのです。そこがモーツァルトの天才であるゆえんでしょう。それらを読み取り、それぞれの性格を浮き彫りにしながら歌うのが、難しくもあり、また魅力でもあります。これまで、歌ったたびに役への解釈が深まっていくのを実際に体験してきました。それは、そのオペラをもっと言えばモーツァルトの音楽をよりよく理解していくための道筋なのです。すべてを克服できた時、モーツァルト特有の神懸かりな美しさが出てくるのです。

——一番好きな役はなんですか？
B 《コジ・ファン・トゥツテ》にし

ても、3人3様の性格の違いを表現するのが楽しいので、特に1つの役に傾倒していることはありません。《ドン・

ジョヴァンニ》においても、最初はツェルリーナで始めましたが、ドンナ・エルヴィーラも歌っています。毎回、新しい役を演じることに、そのオペラを新しい次元から再発見できるのが、モーツアルトのオペラの素晴らしさです。このようにして私は、モーツアルトのオペラに関して3次元的な経験を積むことができていると言えるでしょう。そして別の役を歌うたびに、それがとても魅力的だということがわかってしまい、その中の1つだけを選ぶことが難しくなるのです。

——それでも、1つだけ選ぶとすれば？

B 強いて言えば、フィオルデリージでしょうか……。彼女はとても優しく、矛盾するところもたくさんあり、心の中の葛藤にあふれている役柄です。でもデスビーナもとても興味深く、エネルギーで、まさにフィオルデリージに欠けているユーモアにあふれる性格の持ち主なので捨てるのは難しいですね。例えば、デスビーナはフィオルデリージにはなれませんが、フィオルデリージの世界の一部ではある

のです。反対に、フィオルデリージはデスビーナの世界の中に存在することすらできません。そういう細かい点も考え抜き、それらの役に最適な音楽表現、最適な声の色を与え、歌い演じることができるところが魅力的なのです。自分に一番合った、理想的なモーツアルトの役柄を選ぶのは難しく、

モーツアルトの世界自体が奥深く、素晴らしいと言わざるを得ないのです。——ほかの作曲家と比べて、モーツアルトのオペラを歌い演じる難しさはどんなところでしょうか？

B モーツアルトを語る時、同時にハイドンやサリエリについても考えなければなりません。それは、モーツアルトが生きた世界を考えることであり、彼が影響を受けたウィーンの音楽界、そしてイタリアの音楽界のことも考慮に入れる必要があるからです。彼はとても若いうちから何度もイタリアを旅行しているのですから、その異国文化に感銘を受けたことは確かでしょう。そして、そのような体験から得た彼の音楽のラインというのはとても純粹で、モーツアルト特有のシンプルさがあります。それは偽りのシンプルさ、つまり単純に見えてとても複雑、実現するのが難しいシンプルさなので

す。彼の純粋な音楽ラインを再現すること、レガート、モーツアルト特有のフレーズを保ちながら演奏するということは、簡単なようで、実は高度な技術を要求します。ですから、歌い手にとって基本となる技術の習得、またその技術の向上にも適した教材の性格も持ち合わせています。

私の両親は2人とも歌手で、母はレナータ・スコットと共に、今もマスタークラスで教えています。娘だから言うわけではありませんが、70歳になった今も、とてもいいソプラノ・リリコの声を維持しています。確かな技術を得ることで、楽器をいたわり、長く歌うことができるようになるのです。私はそういう環境の中で育ち、歌うためには、まず基本的な技術が大切だということを通して覚えました。技術なしに、どうして、音楽のなかで自由に表現することができるのでしょうか。私も、難しい点はコンサート前にすべて解決し、本番では多少の緊張はつきものでも、音楽の表現と音楽そのものを楽しむことに徹しています。モーツアルトの音楽にはそのような難しさがありますが、それを克服してふさわしい表現ができた時、彼の音楽特有の神懸かりな美しさが出てくるのだと思います。

モーツアルトの音楽アンサンブルの独特さ

——モーツアルトの音楽アンサンブルについて、独特なものは何だとお考えですか？

B モーツアルトのアンサンブルについて話す時にまず思い出すのは、《フィガロの結婚》の2幕のフィナーレです。アントニオの登場からフィガロが入って来てと、延々と続くそのすべてのシーンが私にとって奇跡的なものです。オーケストラと声のラインが織り成す融和、対位法上の構成がとても興味深いのです。こういったアンサンブルの充実が、モーツアルトのオペラの質の高さを支えているということは、言うまでもないことでしょう。彼独自の単純に見えるフレーズと、見事に調和した複雑なアンサンブルが音楽的に対をなし、そこに彼の細やかな人物描写が相まって、万人を惹き付けるモーツアルトのオペラができあがっているのだと思います。

——作品、逸話からモーツアルトとはどんな人物だったと想像されますか？

B 間違いなく興味深い人物だったと思います。彼の音楽だけでなく、人間としても魅力的だと思います。繊細な

人だったという確信もあります。また、ユーモアのセンスも確かにありましたね。父親やいとこに宛てた手紙の中に、彼の才気煥発な性格がよく表れています。彼のプライベートな生活に関して、もつと言えば、愛に関しても、とても生き生きとしたフレーズがありますので、間違いなく、奇抜な人物だったことでしよう。

2006年1月からモーツァルトゆかりの街、プラハで歌います。私の充実した「モーツァルト・イヤー」の幕開けです。3月の来日公演のために用意しているプログラムの一つでもモーツァルトを歌いますので、楽しみにして下さい。

モーツァルトに関するインタビューを終えて、ひとつ理解できたことがあった。1992年頃だったか、スカラ座でバルトリ氏のリサイタルを聴いた時のことだ。当時20代の半ばだった彼女は、声も姿もまた初々しさがあり、音量もスカラ座をやっと満たすという感じだったが、すでにテクニクは卓越したものがあつた。真っ赤なドレスで、アンコールにケルビーノを歌ったのだが、そんなドレス姿すら、彼女を若い小性に仕立て上げる邪魔にはなら

©Decca



チェチーリア・バルトリ Cecilia Bartoli (メゾソプラノ)

1966年6月4日、ローマ生まれ。74年ローマで《トスカ》の羊飼いで舞台デビュー。82年、聖チェチーリア音楽院に入学。「マリア・カラス・メモリアル・コンサート」でパリ・オペラ座デビュー。89年ウィグモア・ホール、デビューリサイタル。90年アメリカ・デビュー。デッカと録音契約を結ぶ。92年、カーネギー・ホールデビュー。初来日。93年、CD《シンデレラ》が日本レコード・アカデミー賞を受賞。95年、《セビリアの理髪師》でメトロポリタン歌劇場にデビュー。98年11月、同歌劇場で《フィガロの結婚》のスザンナを歌う。05年4月、チューリヒ歌劇場で《ジュリオ・チェザーレ》のクレオパトラを歌う。06年3月、2度目の来日公演。07年1月、チューリヒ歌劇場でヘンデルの《セメレ》に出演。タイトル・ロールを歌う。07年11月、マリア・マリブランへのトリビュート・アルバム「マリア」発売。同内容に沿ったコンサート・ツアーも行う。2012年、リッカルド・ムーティの後任としてザルツブルク聖霊降臨祭音楽監督に就任。

なかつたのだ。その数分間、彼女はどこから見てもケルビーノだった。その、歌唱を通じた演技力に感動した思い出があるが、それは、今回話してくれたような、モーツァルトが描く人物への深い洞察力の賜物だったのだと、あらためて納得したものだ。

このインタビューから7年の歳月が流れた。この直後にリリースされたCD『禁じられたオペラ』、2007年の『マリア』、2009年『神への捧

げもの』、2012年『ミッション』と、独自の視点から制作したCDは次々とヒットし続けている「ユニバーサル・ミュージックより」。2006年3月の来日後すぐに再来日が計画されたが、バルトリ氏はキャンセルせざるを得ない状況に追い込まれ、実現されずに終わった。2012年にはザルツブルク音楽祭精霊降臨祭のオペラ総監督となり、モーツァルトの息吹を直に感じながら活動を続けている。

バレンボイムとは長い空白を経て、

2012年12月3日にスカラ座でのコンサートで共演が叶った。バルトリ氏は、最新CD『ミッション』のラウンチパーティで「コンサート・ツアーの中で、特にスカラ座のコンサートが楽しみ」と、イタリア国営放送RAIのジャーナリストに漏らしていた。

バルトリ氏はこの本が出版されることをたいそう喜んでくれた。この本がご縁となって、また日本に戻って来てくれる事を祈りつつ……。

(初出…音楽の友2006年1月号)